



TITLE:

易經の思想史的研究(Abstract_要
旨)

AUTHOR(S):

本田, 濟

CITATION:

本田, 濟. 易經の思想史的研究. 京都大学, 1964, 文学博士

ISSUE DATE:

1964-06-23

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/211273>

RIGHT:

【 4 】

氏 名	本 田 濟 ほん だ わたる
学 位 の 種 類	文 学 博 士
学 位 記 番 号	論 文 博 第 5 号
学 位 授 与 の 日 付	昭 和 39 年 6 月 23 日
学 位 授 与 の 要 件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	易 經 の 思 想 史 的 研 究

論文調査委員 (主 査) 教 授 重 澤 俊 郎 教 授 宮 崎 市 定 教 授 吉 川 幸 次 郎

論 文 内 容 の 要 旨

この論文は古今の易解釈に対する思想史的観点からの研究を意図したものである。

論文は二篇から成る。第一篇は八章に分たれて易經の成立を考究し、第二篇は六章に分たれて易学の歴史を考究している。

著者はまず易という名称の起源の探求から着手する。易が本来蜥蜴を意味する文字であることは、十翼の一部をなす象及よび象が共に獸名である事実とあわせ考えると、それらがそれぞれ異なった売卜者集団のトテムに由来する名称であったかも知れないとする著者の想定は、易の原初的成立基盤について、ある示唆を与えるものである。

易の經文すなわち卦辞爻辞については、著者は両者の内容には古い卜辞の殘簡および俚諺格言の類に加えて、庶民的な处世智のようなものが看取されることを指摘する。

左伝に見える易の解釈が大象の首部と説卦後半の解釈法の埒内に在ることを明らかにした著者は、十翼のうちこの二者が最も古く、大象の後半・小象および象がこれに次々と判断する。そして著者は、小象と象とは陰陽思想の前駆ともいふべき剛柔二元論を取り、また儒家的色彩が豊富で、經文の素朴な、あるいは無内容ともいえる言葉を哲学的あるいは教訓的なものに変貌させる効果をもつと考える。儒家思想はその祝史めいた前身ならびに運命論的立場のゆえに、他の学派よりも易と結合する可能性は豊富であったが、ある発展段階において宇宙論を取り入れる必要を生ずるに及んで、易との関係が急速に近くなったというのが、著者の根本的見解である。

易を儒家の經典たる地位に上せた決定的要因は、著者によれば、繫辭・文言および説卦の一部の成立に外ならない。この三種は大帝国の設立に伴う、政治の規範たるべき實用理論への関心によって出現したものであるから、その成立は秦漢時代と並行するものと考えることができる。十翼のうち最も新しい部分は序卦・雜卦の二者で、これは恐らく前漢初期の經学者占筮者の制作に係るとされる。

第二篇の第一章「前漢の易学」において、著者は孟喜・京房の易学と前漢王朝における君主の呪術的性

格一神格化一の思想との関連に注目し、讖緯や太玄の思想もまたこの関連において解釈されるべきを指摘する。第二章「後漢の易学」は鄭玄・荀爽・虞翻の易解釈に見られる特徴を挙げ、その学術史的意義を考究したものであるが、鄭玄が他経との体系的関係に留意して易解釈を樹立した点、荀爽の升降の法が一種の理想主義的觀念の所産であり、時代の名教に忠実すぎる心理の反映に外ならないことを明らかにしている。

第三章は「王弼の易学」と題される。従来の易学における呪術的性格が王弼に至って極度にまで縮小されて合理主義精神がそれに代り、そして官場における貴族階級の不安意識が反映されている点に、その思想史的特徴が発見されると著者は主張する。

第四章「周易正義その他」では、唐の周易正義が鄭玄注を斥けて王弼注を採用したこと、宋代哲学との歴史的関係について注目し、また易を老莊と並んで玄学的に理解しようとする好尚が現れてくる事実などを通じて、卜筮そのものへの懐疑的態度が推知されることは、当時一部に現れた合理主義と無関係ではあり得ないと論ずる。

第五章「宋明の易学」において論及されているものは、宋については張載・程頤・朱熹および司馬光の潜虚、明については来知徳である。張載の易説は自己の世界觀を経書を藉りて展開し程頤の易伝は専ら人事に即して説く点で王弼に近く、道学的教訓性が強い。朱熹の本義は程伝に依拠するが、程氏の取らなかった先天諸図を取り、卜筮面を重視することに特徴が見られ、司馬光の潜虚は天地人の数理的図式的体系を作り出そうとする要求に導かれたものと考えられ、この点で資治通鑑との関連性が認められることに言及している。

第六章「清朝の易学」では王夫之・胡渭・乾嘉の易学・惠棟・焦循の五項目について論述する。王夫之の易学は張載の哲学を根幹とした倫理的解釈に加えて、象数訓詁の面にも注意を怠らず、かつ強い歴史的関心と徹底した攘夷思想とを特徴とし、胡渭については宋人の河図洛書を完膚なきまでに攻撃しながら、真の河図洛書が存在を疑わないところに、不可知論に連なる現世肯定的努力主義的悟境が見られると言う。惠棟と焦循とは共に乾嘉の代表的易学者として評価されるが、惠棟の周易述は畢竟虞翻・荀爽の原理によって易を解するものに外ならないこと、焦循の易図略・易通釈などは易の全部について一貫した法則性を立てることを主眼とし、また彼において易の呪術性は完全に払拭されていることが注目すべき点として指摘されている。

論文審査の結果の要旨

易は十翼が完成して儒家の基本經典となされて以来、その独自の哲学思想の故をもって、歴代の儒家によって一貫して重要視されてきた。特定個人の易学については過去においてもある程度見るべき研究がなされているが、古今の主要な易学を思想史的観点から全体として発展的に把握し、その上に立ってそれぞれのもつ思想史的意義を闡明することは、従来ほとんど試みられることがなかった。本論文がこの問題を正面から取り上げたのは、著者の認識の正しさを示すものである。そして、著者が王夫之・焦循などの易学を精詳に紹介して評価を加え、五経正義と宋代哲学との内面的関連性について論ずるなどは、易学研究上注目すべき新しい成果というに値する。きわめて広汎な資料に対する分析や解釈において避け難い多

少の欠陥があるのは、著者将来の努力によって補正されよう。よって本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。